

むかしより何回この橋を渡ったことが 愛すべき心齋橋の再発見

前回に続いて大阪人の“橋梁愛”である。今年5月、大阪市教育委員会は、大阪市文化財保護条例に基づき、新たに18件の文化財を大阪市指定有形文化財及び有形民俗文化財に指定したことを発表した。

有形文化財が17件、有形民俗文化財が1件で、前者には、延宝7(1679)年から元禄4(1691)年間の創建と推定される藤田美術館多宝塔(旧光臺院多宝塔)や、大阪府立博物館の天井画を描いた上田耕冲を中心に制作され、明治32(1899)年頃に奉納された住吉大社所蔵の「大阪画壇奉納扁額」(全55面)、大阪天満宮所蔵の「天神信仰関係画像史料一括」(全77点)なども含まれている。

個人的に目をひいたのが「大阪の近代橋梁遺産 心齋橋石橋部材」である。心齋橋は大阪を代表する繁華街として賑わっているが、昔ここに長堀川が流れ、“心齋橋”という橋があったことをご存じではない人も多いかも知れない。その心齋橋を飾った装飾柱4基が指定されたのである。

心齋橋は、埋め立てで今は長堀通りになっている長堀川に架かり、江戸時代は木造であったが、明治6(1873)年にドイツから部材(トラス)を輸入し、鉄橋に架け替えられた。鉄橋としては、大阪で3番目、日本で6番目に誕生した橋という。錦絵や銅版画など大阪名所絵に好んで描かれた。当時の鉄橋の主要部分は、花博記念公園鶴見緑地の緑地西橋として保存されている。

長堀川北岸に市電を通すため、橋の強化を意図して鉄橋が石造りに架け替えられたのが明治42(1909)年である。設計は大阪府土木部、意匠設計は現・大阪府立中之島図書館(1904年竣工、国重要文化財)の設計者としても知られる建築家・野口孫市(1869~1915)である。

大阪最初の純西洋式の石橋で、四つ葉のクローバーを思わす欄干が美しく、川に映る姿から眼鏡橋とも呼ばれて親しまれた。今回指定の装飾柱は、橋の中央、東西2個所にあったバルコニーを支える部分で、眼鏡に見立てると鼻の位置とでも言おうか。華麗な装飾がなされ、橋の東西に二基ずつ配置された。

戦後、昭和37(1962)年に長堀川が埋め立てられ、心齋橋は横断歩道に変わったが、橋の石材は、東京オリンピックと同じ昭和39(1964)年に、横断歩道橋



絵葉書「心齋橋(大阪名所)」眼鏡橋と言われた様子が見える。

の歩道橋として移築された。歩道橋に転用し保存した旨を記すこの時の銘板が、現在は南東の親柱(車道側)に移され^は嵌めこまれている。

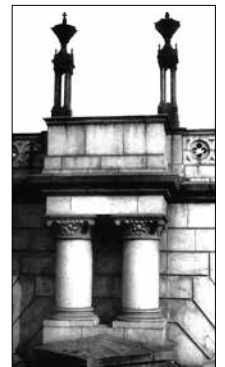
私が一番記憶する心齋橋が、この歩道橋である。横断歩道のすぐ横にあるので、あまり利用者はいなかったが、気が向いたら歩道橋に登ってクローバー型の欄干を眺めたりした。しかし、装飾柱4基はこの歩道橋には用いられず移設され、市民の記憶からも忘れられていったのだろう。

平成9(1997)年、地下街のクリスタ長堀が開業した際、歩道橋は廃止され、もとの心齋橋が架かっていた位置、つまり横断歩道の位置に石橋の欄干がガス灯と共に復元された。大阪人の心齋橋という橋梁への思いは深い。前年に京橋から延伸されたOsaka Metro長堀鶴見緑地線の心齋橋駅にも、橋の欄干やガス灯をモチーフとした装飾が施されている。

そして令和2(2020)年、橋脚の装飾柱4基すべてが保存されていることが分かり、今回の文化財指定になった。

市内にある絵画や工芸、建築、民俗資料などを対象とする大阪市指定文化財は、市民として誇るべき文化財の存在を再認識させてくれるものであり、後世に伝えていくのが、この街に生きる我々の使命であろう。

奉納扁額や天神信仰画像なども、大阪の画家たちの活躍を伝える資料として、美術館や博物館で公開され、より多くの人の目に触れることを望むが、石橋時代の戎橋の欄干が、道頓堀川の遊歩道に残され、重厚でモダンな“大大阪時代”の雰囲気を感じているように、心齋橋の装飾柱も、もとの位置近くで、市民の目に触れ、時代の気分を感じさせてくれるようになればと思う。(現在は大阪市の施設内で保管しており、ご覧いただけません)



ガス灯のあるバルコニーを支える心齋橋の2本の装飾柱
「大大阪橋梁選集」創生社出版部、1929年より

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現象―」(創元社)など。